

新しい詩の声・作品

〔最優秀賞〕

## 中村 梨々

### 二月の空は呆れるほど高い

新しい誓いも立てないで一か月を軽く過ごしてしまつと、思いのほか髪が伸びた。首の後ろでひとつに纏めて結んだら、風がとても冷たかった。毎日の通勤は車だから、風は関係がなかった。でも、朝起きた時から寒い、車に乗ってもやっぱり寒かった。一日が寒いうちに過ぎる。他のこともみんな寒さのなかにある。

ピーナツを好んで食べる。ビタミンEがあつて、抗酸化作用があつて、つまり年を取っても若くいられるような作用があるらしい。まだ見たことないEくん、ありがとう。香ばしさ、噛んだ時の奥歯にあたる感触、触れてないのに口説かれている。身体の内側から。

これでよかつたのか、と時々思ったりする。時々「これでよかつたのか」と思うことを思い出す。思い返す。前にもこんなふうに通つていた。今もあと何年か後にも。届かなかつたことつて多いな。知らないあいだにも春は届いていく。

小さなあつたかさを喜んでいて、日が次第に長くなつた。明るいほうがよく見える。虫のように飛んで春に向かっている。羽音にふるえる。目が霞む。寒さに体の動きが鈍く、そんなに早くは飛べない。暗さがあとからついてくる。すぐ後ろまでやってきていい匂いをさせる。もがくと闇に解かれる。三月になる。

〈優秀賞〉

# 花井 満

## 投影図

陽がふる午後のこと

二年生教室にぼくがいた

授業参観日の廊下の窓は

取り払って

黒光りに磨いた板廊下から

親たちが覗くのだ

母に気づいたがほかに誰も来ない

親たちは畑でいそがしいのだ

見上げる空は青く

窓際に寄り添った空色のワンピース

三十二歳の母に　ときめいた

やはり陽がふった　五年前になるか

午後の

保養ホーム三階で

ピカピカの廊下はリノリウム

ノックしないで入る

布団にくるまった母は

居心地のいい舟に

乗っているようだ

ぼくは夕焼けを歌った

ひとりだけの授業参観のやり直しをした

目を細める母は

ほんとうの舟に乗って

ゆるやかに出航した

〔優秀賞〕

田中 秀人

未然形（始祖鳥の空）

さあ 走ろう こう言われた人は今 走っていますか 走っていませんね だから走ろうよ

この いまだそうでない形のことを 未然形といいます

一緒に走ろう 若い君たちには かないませんが 右足をひきずりながらですが 先生もがんばってみます だから さあ 走り出しませんか

あれは、病室からの先生の最後の伝言だった。

ずっと昔 何かの図鑑で 始祖鳥の化石の写真を 見たことがあります 泥に残された まさに空へ 飛び立とうとする姿

今 この始祖鳥は飛んでいますか 飛んでいません でもね 皆さん

この鳥は必死に飛ぼうとしています

この未然形こそ

私が 若い皆さんに伝えたいものです

私の右手は まるで孤鳥のように遠く取り残され いうことを聞いてくれません 不如意といいます 思い通りにならないこと

この手紙も 妻に書いてもらっています

これは 私からの若い君たちへの最後の宿題です 走ろうよ こう言われた人は今 走っていますか

遠い海鳴りの聞こえる、丘の上の中学校。

あの夏に残された宿題を解くために

僕は、靴紐を締め薄曇の空を見上げる。

〈優秀賞〉

## 葉山 美玖

### 1と9がない

あなたは私の愛を映画館で囁るポップコーンのように放り出して、「もうキミは要らないよ」と呟いた。私がコーラをあなたの背中にぶちまけると、みるみる内に褐色の染みが広がった。あなたは黙ってスーツを脱いで「クリーニング店へ行ってくれないか？でなければ別れる」と言った。私は空になったコーラの瓶であなたの後頭部を強かに殴った。あなたは床に倒れて動かない。

私は119番をコールしようとしたけれども、何故だか電話機のプッシュボタンからは、1と9がなくなっていた。あな

たは昏倒したまま動かない。ドアを開けて外を左右に見まわすと、誰もいない。素早く黒いビニール袋にあなたを詰め込もうとしたら、死体はスーツとしぼんでグニャグニャの抜け殻だけが残った。

私は台所にへなへたと座り込んだ。あなたはただの空気人形だったのだ。しわしわになったシャツを脱がすと、ぺちゃんこになった皮膚の塊だけが残った。私はこれを愛していたのだ。壊れかかったクーラーの音が部屋に静かに響いていた。

〔優秀賞〕

## 山田和基

### ザアカイ

「小さい者」と誇られた彼は

権力をまとい徴税する。さもなければ

無花果桑の木に自らをくくってしまつたのだろう

小さい者の地位は高くなり

代償に心は卑しく落ちた、でなければ

足取りは徴税の度にああ、重くはならない

（卑小なる徴税人、心の枷は貨幣の重さ）

奇跡が人々の波を割るとき

徴税人のために割れる波はない

人々の生活を重くしたのは、徴税人なのだから

彼が無様に小さい身体で

無花果桑の木を登つたのは

満ち足りない心を軽くするためだ

（徴税人も村人もみな弱いものを叩き合つた）

醜い木登りにどれほど波が笑い、泡立つたらう

奇跡は波の中、桑の木を見上げて

「ザアカイ」と彼を呼び、宿泊を請うた

「清く正しい者」と語りかける

たつた、それだけの奇跡

彼を小さい者でなく徴税人でなくザアカイと呼ぶ

（その優しい声が、愛に満ち枷をほどき）

ザアカイの

無花果桑の木を降りる

足取りは心は、もはや

羽根のように軽くなる